

生涯学習的視点から見た「なわとび」の可能性

目次

序章．問題の所在—日本におけるなわとびイメージ—	1
第1章．なわとびとは	3
第1節．身体運動としてのなわとびとスポーツとしてのなわとび	4
第2節．なわとびの目的	6
第2章．なわとびの跳び方の多様性とは	7
第1節．跳び方の多様性に関する基本的性質	7
第2節．従来の分類方法の問題点と新たな分類方法	8
第3節．なわとびの跳び方の多様性—「技」と「群」—	11
第3章．〈なわとび〉の抱える課題	13
第1節．「なわとび」の外にあるなわとび	13
1. 「なわとび」とダブルダッチ	13
2. 「なわとび」と連鎖とび	14
第2節．〈なわとび〉の転換の必要性	16
第4章．〈なわとび〉の課題解決に向けて	17
第1節．新たな系統図について	17
第2節．新たな系統図の利点	19
第3節．新たな系統図から見える〈なわとび〉の新たな課題	22
終章	23
付録	26
参考文献	31
注	34

序章．問題の所在—日本におけるなわとびイメージ—

本論文の目的は、現在わが国で一般にイメージされる「なわとび」という概念をとらえなおすことである。

なお、題目で「『なわとび』の可能性」と表記したのは、現在のわが国で一般にイメージされる「なわとび」と、「縄を跳ぶ」という本来の意味でのなわとびとが異なることを明示するためである。本論文では、「なわとび」という言葉が、前者を指す場合は〈なわとび〉と表記し、後者を指す場合は単になわとびと表記するものとする。

現在わが国では、一般に、「なわとび」という言葉からは、体育の教材や子どもの運動遊びといったことしかイメージされない。すなわち、「なわとび」は、トレーニングやダイエットなどのために行うものであり、おとなが自らの楽しみのために行うものではない、というイメージである。

ポール・ラングランは、「体育・スポーツ教育が生涯のある短い期間にだけ行われるものだといったことは受けつけない方がよい¹」と述べ、さらには、「スポーツを生涯教育²の全体によりよく統合し、それをそのもっぱら筋肉的な機能や教養上の隔離状態から解放し、知的、道徳的、芸術的、社会的、市民的な部門の諸事業と、もっとしっかり、よりあわせるようわれわれをうながす³」と述べている。わが国では、「体育」という言葉と「スポーツ」という言葉が混同されて使用されてきた⁴ことを考慮すると、これらの言説における「体育・スポーツ教育」や「スポーツ」という言葉の指す意味を考える必要が厳密にはある⁵。しかし、ここではこみいった議論を避けるために、「体育・スポーツ」という意味でラングランの主張をとらえる。すると、新谷崇一が述べるように、ラングランの主張は、「体育・スポーツを個別的領域として捉えるのではな

く、他の文化との関連において統合（Integrate）したものとして、しかも生涯全体にわたって行われなければならない⁶」というものであると理解できる。

このような視点に立つと、わが国の、前述したなわとびのとらえられ方は、望ましいものではないといえる。

現在わが国では、ほとんどの人間が、学校教育の中でなわとびと出会う。この学校教育におけるなわとびについて、山市孟は「教材としての採択の原理、児童・生徒のかかえている心身の各発達課題に対していかに応えるものであるのか、発達段階に応じた技能の体系化、生涯を通じてのこの運動との関わり方など、いわゆる教材論的研究が必ずしも十分にはなされてこなかった⁷」ことを指摘している。さらに、「それゆえに、各教育現場での実践においても、数種目の跳び方を列挙し、指導者が学習者にそれぞれの遂行時間や回数などを凡そ指示するだけの、つまりその教材に置かれている教育的ウエイトは、運動量の確保に終始するなどの扱い方になっている場合も少なくない⁸」と山市は指摘している。

現在、学校教育の中で行われているなわとびは主に短なわとびと長なわとびである。山市が指摘するように、学校教育の短なわとびにおいては、多くの場合、なわとびカードなどが用いられ、限られた数種類の跳び方を、ひっかかるまで、体力の続く限り回数を重ねることが求められている。そして長なわとびにおいても、ひっかかるまでに何回跳べたか、もしくは制限時間内に何回跳べたかの、概ねどちらかしか求められていない。

坂本勝江が行った調査によると、保育科学生 201 名のうち、半数の 101 名の学生がなわとびを嫌い・大嫌いとした。そして嫌いな理由としては、「疲れる」「少しの種類しか跳べない」「同じことの繰り返しで楽しく

ない」「足やお腹が痛くなる」といったものが挙げられていた⁹。このような回答は、前述した体育でのなわとびの行われ方が反映されたものであると言えるだろう。

このような現在のなわとびをめぐる状況を改善するために必要なことは、学校教育でのなわとびの「教え方」を見直すことではない。なぜなら、山市が指摘したように、教えるべきなわとびそのものに対する研究が、そもそも十分に行われていないからである。ここに〈なわとび〉のとらえなおしの必要性が存在する。

そこで本論文では、今後のなわとび研究の基礎となるよう、筆者の大学におけるなわとび活動の経験もふまえ、なわとびが本来持つ性質を明らかにし、その性質から見る〈なわとび〉の課題と、その課題を解決する糸口となる考え方を示した。

1章では「なわとび」という言葉の意味を確認し、なわとびが持つ目的を考察する。2章以降では、なわとびの跳び方の多様性と、そこから見える課題について考察する。

第1章. なわとびとは

なわとびとは、その名の通り「縄を跳ぶ」という行為のことである¹⁰。ここで「行為」という曖昧な言葉を用いたのは、以下のような意図がある。たとえば、「行為」という言葉を用いないのであれば、「なわとびとは縄を跳ぶ〇〇である」と他人に説明するとき、この〇〇には一般にはどのような言葉が入れられるだろうか。一般には、「遊び」や「運動」という言葉が入れられるだろう。筆者はここに「スポーツ¹¹」という言葉を入れることを提起したいのである。

例えば、スケートには、フィギュアスケートやスピードスケートなど

様々な競技や遊び方が存在する。なわとびを、ここでいうスケートと同じ概念としてとらえられれば、スケートが単にスピードを競うものではないように、単に回数を重ねるものとしてのなわとびのイメージからの転換を図ることができる。この「スケートという概念としてのなわとび」はどのように理解すればよいだろうか¹²。

第1節. 身体運動としてのなわとびとスポーツとしてのなわとび

久保正秋の、以下の記述が、「なわとび」という概念を考える手がかりとなる。

「スポーツをする」とはどういうことであろうか。たとえばサッカーにおいて行われていることは、キック、ドリブル、ヘディング、パスと名づけられた身体運動である。しかしながら、このような身体運動そのものを「サッカー」と言うことはない。(中略)サッカーという「スポーツをする」とは、それを構成するキック、ドリブル、ヘディング、パスなどという形態の身体運動を行うことと考えることができる¹³。

久保は、サッカーを例に挙げ、「スポーツ」と「身体運動」の関係について説明している。久保の言う「スポーツ」と「身体運動」という概念を、スケートとなわとびに適用して考えてみる。スケートというスポーツで行われていることは、スケート（氷の上を滑る）という身体運動である。これと同様に、スケートというスポーツと同じ概念としてなわとびをとらえるとき、なわとびというスポーツで行われていることは、なわとび（縄を跳ぶ）という身体運動であることが分かる。

上記のことから、「スケート」という言葉には、「氷の上を滑るという動作そのもの」という身体運動としての意味と、「氷の上を滑って行われるもの」というスポーツとしての意味が存在することがわかる。これと同様に、「なわとび」という言葉にも、「縄を跳ぶという動作そのもの」という身体運動としての意味と、「縄を跳んで行われるもの」というスポーツとしての意味の二つの意味が存在すると考えることができる。

両者を区別するために、本論文では以後、前者を「身体運動としてのなわとび」と呼び、後者を「スポーツとしてのなわとび」と呼ぶ。

「なわとび」という言葉の使用の中で、この二つの意味が明確に区別され、スポーツとしてのなわとびの概念が打ち出されることは、これまでほとんど行われてこなかった。

日本ロープスキッピング連盟は、そのホームページで「スポーツとしてのなわとびを普及・発展させるために、名称とルールを定めた」ものを「ロープスキッピング（なわとび）」と定義している¹⁴。しかし、その事業内容は「ロープスキッピング（なわとび運動）の普及、奨励」となっている¹⁵。ここには、スポーツとしてのなわとびと、身体運動としてのなわとびの混同が見受けられる。また、なわとびに関する論文の中では、なわとびは、ほとんどの場合「なわとび運動」と記述されており、スポーツとしてのなわとび、またそれに相当するものに言及されたものは見当たらない。

このことが、現在わが国で、「なわとび」が、例えば「腕立て伏せ」のような単なる身体運動のひとつとしてしかとらえられていないことと関係があるのならば、身体運動としてのなわとびとスポーツとしてのなわとびは明確に区別し使用される必要があるだろう。

第2節. なわとびの目的

前節では、「なわとび」という言葉には、身体運動としての意味とスポーツとしての意味が存在することを確認した。したがって「なわとびの目的」には、身体運動としてのなわとびの目的という意味と、スポーツとしてのなわとびの目的という意味が存在する。すなわち、「なわとびの目的は何か」という問いは、「なぜなわとびを行うのか」という意味と「なぜ縄を跳びこえるのか」という意味の、2つの意味に解釈できるのである。そのため、上記の問いに対して正確に答えるためには、スポーツとしてのなわとびと、身体運動としてのなわとびを区別して考える必要がある。

例えば、高橋浩二は、なわとびは「跳ぶこと自体が目的となる¹⁶」と述べている。この言説をスポーツとしてのなわとびの視点からとらえると、なわとびは、心身を鍛えることではなく、なわとび（というスポーツ）を行うことそのものが目的となるという意味に解釈することができる。

一方で、高橋の言説を身体運動としてのなわとびの視点からとらえると、なわとびは、まさに縄を一度跳びこえることが目的となるという意味に解釈することができる。実際には、高橋は、「なわとび運動は」「最終目標となりがちなゲーム要素を排除し、跳ぶこと自体が目的となる場所に特性がある¹⁷」と述べていることから、ここではこの後者の意味である。

さて、「スポーツそのものの意義¹⁸」についても触れる必要のある、なわとびというスポーツの目的については、ここでは言及せず¹⁹、なわとびという身体運動の目的に着目するものとする。

サッカーで行われるキックという身体運動を引き合いに出して考

えてみる。キックという身体運動は、キックすることそのものが目的として行われるわけではない。キックの目的は、ボールを意図した空間に移動させることである。なわとびという身体運動も、多くの場合、足が縄にひっかかるのを防ぎ、縄を回し続けるためという目的のために行われ、縄を跳ぶことそのものを目的として行われるわけではない。

しかし、なわとびという身体運動は、まさに縄を跳ぶことそれ自体を目的として行うこともできる。例えば、初めて二重とびを試みる子どもは、二重とびを一度でも行うことそのものを目的としている。すなわち、なわとびという身体運動は、ある跳び方を一度でも達成するという目的のために行うことも可能である。このような身体運動としてのなわとびの性質について高橋は述べているのである。

第2章. なわとびの跳び方の多様性とは

第1節. 跳び方の多様性に関する基本的性質

身体運動としてのなわとびがそれ自体を目的に行えるのはなぜだろうか。なわとびには、二重とびや交差とびなど、筋力や縄を巧みに扱う力を高めることによって初めて行うことのできる跳び方もあれば、高橋が「なわとび運動は単純な運動を複雑化させることが容易であ²⁰」ると述べるように、人数、縄の本数などを変えるだけで行うことができる新たな跳び方も存在する。このように、なわとび全体で見れば膨大な数の跳び方が存在するのである。そのため、ある跳び方で縄を通すことそのものを目的として行っても、容易にすべての跳び方が達成されることはない。また逆に、ほとんどの跳び方が困難を極めるわけでもない。このような跳び方の多様性によって、身体運動としてのなわとびは跳ぶこと自体を目的に行うことが可能になるのである。

現在わが国で、身体運動としてのなわとびが、跳ぶこと自体を目的に行われず、もっぱら回数を重ねるために行われているのは、このような跳び方の多様性が明らかにされていないためではないだろうか。そこで、本章ではまず、なわとびの跳び方の多様性とは何かを明らかにすることを目的とした。

第2節. 従来の分類方法の問題点と新たな分類方法

あやとびや二重とびといった、個人がいかに縄を回すかという概念は「技」といってよいだろう。

一方、短なわとびと長なわとびといった、縄と人とのつながり方の枠組みは、「技」に対して、どのように呼べばよいのだろうか。

これまで行われてきた教材としてのなわとびの研究で、次の図にあるような人と縄とのつながり方を基盤にした多くの跳び方が発見されてきた。

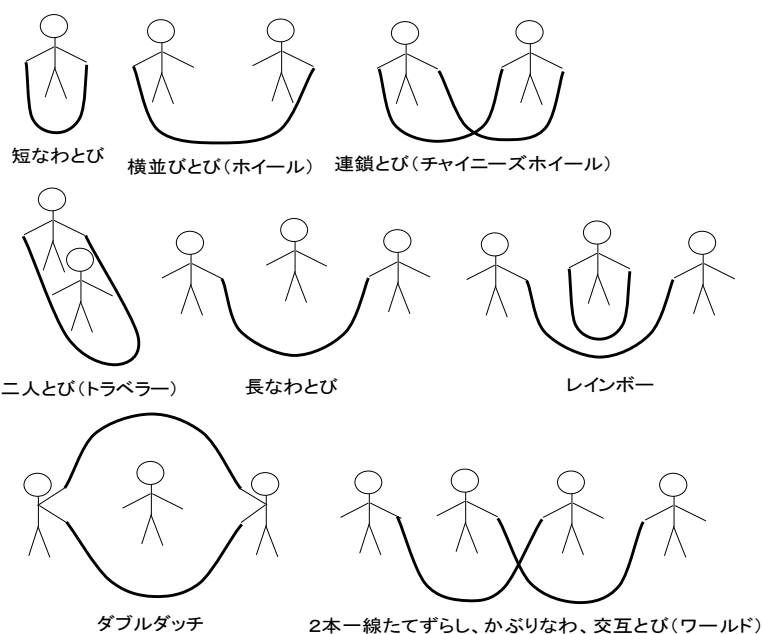


図 1 人と縄とのつながり方を基盤とした跳び方の一覧

図 1 は以下の文献をもとに筆者作成。水落芳明・松谷和彦「コンビネーションなわとびによる人間関係の向上に関する事例的研究」『上越教育大学研究紀要』32, 2013, 161-168 (横並びとび・連鎖とび・二人とび)。上原三十三「なわとび運動の教材づくり」『愛知教育大学保健体育講座研究紀要』26, 2001, 11-16 (レインボー・2 本一線たてずらし、かぶりなわ、交互とび)。ただし「(ワールド)」は、筆者の周りのなわとびを愛好して行う人間から実際に呼ばれている名前である。

しかし、これまで日本では、なわとびの跳び方に関して、このような人と縄とのつながり方の多様性はそれほど研究されてこなかった。人と縄とのつながり方が、既存の短なわとび、長なわとびと異なると、その跳び方の名称が論文によってバラバラになり、整理がなされてきていないのである。例えば、水落芳明と松谷和彦は「単縄²¹1 本もしくは 2 本を使用し、2 人で縄を跳ぶ技」を「ホイール」としている²²のに対し、上原三十三は縄を 1 本使用するホイールを「横並びとび(図 1 上段中央)」、縄を二本使用するものを「連鎖とび(図 1 上段右)」と分けて表記している²³。

このように、短なわとび・長なわとびを除く、人と縄とのつながり方を基盤とする跳び方の名称に関しては、その位置づけは不明瞭である。これには、なわとびの跳び方を暗黙のうちに短なわとびと長なわとびのみに分類してしまう従来の分類方法が関連していると思われる。

上原は、「なわとび運動は、短なわとび運動と長なわとび運動に大別することができる²⁴」と述べている。上原は、「自分で回したなわを自分自身でとぶのが基本であり、「とび手が回旋するなわを外から入って抜けていくことはない」ものが短なわとび運動であり、一方、長なわとび運動では「とび手は回旋しているなわに入ったり、とび越したり、通

り抜けたりすることを基本とし、「なわを回旋させる人ととぶ人は異なる」と説明している²⁵。

上原の説明に従うと、二人とび（図 1 中段左）は長なわとび²⁶に属することになる。しかし短なわとびにもう一人跳び手が加わっただけの跳び方が長なわとびに分類されてしまうのは、一般的な感覚とは異なり、また分類が煩雑になってしまうため適切な分類方法とは言えない。

また、短なわとびを一人で縄を回す運動と分類し、長なわとびを二人で縄を回す運動と分類すること、もしくは短なわとびを短縄を使った運動と分類し、長なわとびを長縄を使った運動と分類すること、これらはいずれにしても特殊な例外が必ず出てきてしまい煩雑になることは免れない。前者の分類方法だと、連鎖とびが長なわとびに分類されてしまうし、後者の分類方法だと同じ跳び方でも使う縄によって短なわとびにも長なわとびにも分類可能ということになってしまうのである。

このように考えると、すべての跳び方を、短なわとびと長なわとびのどちらかに分類しようと試みることは、短なわとび、長なわとびという分類の基本的な枠組みすらも危うくさせてしまうものである。

したがって、すべての跳び方を短なわとびと長なわとびとに大別して考えることは適切とは言えない。

そこで筆者は、跳び方の基盤となる縄と人とのつながり方が異なるのであれば、それぞれに名称をつけ、それらをなわとび「群」として分類することを提案する。

このなわとび「群」の考え方においては、なわとびを単に短なわとびと長なわとびという二つだけに分類はしない。一人で縄を回し、回した人間がその縄を跳ぶものを短なわとび、二人の回し手が回す縄を回し手ではない人間が跳ぶものを長なわとび、そして二人で 1 本の縄を回し跳

ぶものを横並びとびと分類するといった具合である。つまり、短なわとびと長なわとびを、なわとびを構成する二大要素として扱うのではなく、二人とびや横並びとび、連鎖とびなどに並ぶひとつのジャンルとして扱うということである。

そうすることで、なわとびに対して無理が生じる分類を行う必要がなくなる。そして、分類の中で、多様ななわとび群の存在やそれらの関係に気づく契機を得ることもできる。

以下、本論文では、短なわとびや連鎖とびを、ひとつのなわとび「群」という概念で扱っていく。

第3節. なわとびの跳び方の多様性—「技」と「群」—

なわとびの跳び方は「技」と「群」という概念から説明できることが分かった。なわとびの跳び方の多様性が、技の多様性と群の多様性からなることをここで確認する。

技の多様性とは何か。短なわとびを例に挙げると、日本ロープスキッピング連盟のトリックシート²⁷には、ステップ系、クロス系、ローテーション系など、100以上もの技が記されている。この中には習得が非常に困難なものもある一方、フリースタイルなわとび²⁸という競技として点数が与えられるものしか記されていない。子どもでも実際に行える跳び方の数は短なわとび群だけで少なくとも数十個はあると言える。

なわとびの特徴の一つは技の組み合わせで新たな技が生み出せることである。例えば、一重とび²⁹で行える技の数が10個の場合、難易度や実現性を無視すれば二重とびでそれらの技のすべての組み合わせを試すとそれだけで10の2乗の100個になる。また、クロスクロス（交差とびをした後に、交差している左右の腕の上下を入れ替え交差とびをす

ること)のように同じ一重とびの中でも技の順番によっても新たな技が生み出される。

群の多様性とは何か。例えば図1に記されているなわとび群に加え、例えば二人とびで、跳ばせる人を一人増やすことにより、三人とびを行うことができる。また、連鎖とびで、人を一人、縄を1本増やすことにより、三人連鎖とびを行うこともできる。このように人数や縄の本数、そして縄の持ち方などに応じて、多様ななわとび群を創り出すことが可能になるのである。

この群の多様性と前述した技の多様性が組み合わせるとどうなるか、というのが「組み合わせ跳び」の発想³⁰である。例えば図1中段右のレインボーを見てみる。このなわとび群は長なわとびにおける跳び手が短縄を持ったものである。すなわちレインボー群は長なわとび群と短なわとび群が組み合わせられたものと理解できる。このことから、上原が述べているように³¹、難易度や実現性を無視すれば、レインボー群には、〈長なわとびで行える技の数〉^{かける}〈短なわとびで行える技の数で行える技の数〉の跳び方が存在することがわかる。短なわとびだけでも相当な数の技が存在することを考慮すると、このようななわとび群から構成されるなわとび全体に含まれる跳び方は、挙げればきりが無いほど膨大であることがわかる。

これが技と群の多様性からなるなわとびの跳び方の多様性である。

なお、この跳び方の多様性についてのより詳しい解説は付録としてつけている。

第3章. 〈なわとび〉の抱える課題

前章では「群」という新たな概念から、なわとびの跳び方の多様性を明らかにした。しかし、一般になわとびの跳び方の多様性に目が向けられることはないのはなぜだろうか。

わが国では、従来になわとびの分類方法とも相まって、「なわとび」という言葉が、短なわとび群もしくは長なわとび群の2種類のみを指す言葉としてしばしば使用されてきた。つまり、付録の図3のように、ダブルダッチ（図1下段左）や連鎖とびといった短なわとび・長なわとび群以外の新たななわとび群が、「なわとび」とは異なるものとして捉えられているのである。

本章では、そのような現状を、具体例を挙げつつ説明し、その問題点を指摘する。そして付録の図4のように新たななわとび群をも含めて、「なわとび」をより大きな枠組みとしてとらえる新たななわとびイメージへの転換の意義を提起したい。なお「なわとび」という言葉の使い方に関しては付録の図5を参考にしてほしい。

第1節. 「なわとび」の外にあるなわとび

1. 「なわとび」とダブルダッチ

坂本の調査によると、保育科学生201名のうち、体育の授業としてなわとび運動を行ったと答えた人数の割合は小学校では92.0%であるのに対し、中学校では10.5%であった³²。このように、なわとび運動が中学校から行われることが少なくなる理由について、谷本雄一と日野克博は、「短縄運動では中学校での技の発展が限られていることや、『縄跳び運動』として単元を構成するには、内容の深まりや生徒の意欲が持続しないなどの課題の多いことが考えられる³³」として、ダブルダッチを

教材として扱う意義を主張した。

すなわち、ダブルダッチは、「高度な技に挑戦したり、競争や創作活動をしたりする要素を持っており、ジャンパー[縄の跳び手：引用者補足]とターナー[縄の回し手：引用者補足]で協力しなければ成立しないことから、互いに協力して運動に取り組む態度も育成すること可能であ^{3 4}」り、また、「技の上達に伴って面白さが増大し、運動衝動や運動する喜びを生み出すとともに、友達やグループで教え合ったりして、協調性を養うことができる^{3 5}」運動と捉えられているのである。

ここで疑問が生ずる。短なわとび・長なわとびもダブルダッチも同じなわとびであるにも関わらず、なぜダブルダッチだけが高度な技に挑戦することができたり、協調性を養うことができるとみなされているのだろうか。縄の跳び手であるジャンパーと縄の回し手であるターナーが協力する形で創作活動を行うことに意義があるのであれば、長なわとびで創作活動を行えばよいのではないか。

このような疑問に答えられることなしに、現在わが国では、ダブルダッチが、既存の「なわとび」とは全くの別物として扱われ、短なわとび・長なわとびは発展性がないとされていることがある。

2. 「なわとび」と連鎖とび

従来、ダブルダッチは、使用する縄、人数、縄の回し方が短なわとびと異なることから「なわとび」とは捉えられにくかった。しかし、短なわとびと同じ縄が使用され、回し方も短なわとびとはそれほど変わらない連鎖とびもまた、「なわとび」とはされてこなかった。

佐伯聡史と池田優介は、その共著論文の中で、連鎖交互とび^{3 6}を取り上げ、次のような系統図を作成した。

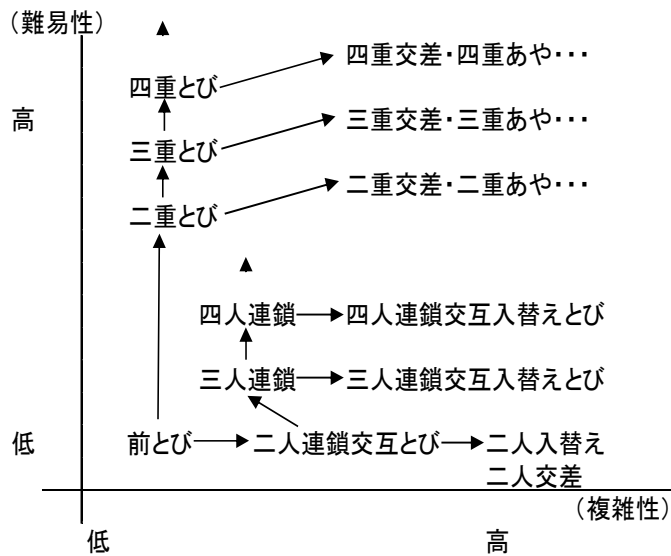


図 2 なわとび³⁷と連鎖交互とびの系統図

佐伯聡史・池田優介「新しい教材としての『連鎖交互とび』の有用性について」『富山大学人間発達科学部紀要』5(2), 2011, p.69, 図3 「なわとびと連鎖交互とびの系統図」より筆者作成

同図において、縦軸は「技の難易性」を表し、横軸は「運動の複雑性」を示している³⁸。

さて、佐伯らは、短なわとび群と連鎖（交互）とび群では難しさの観点が異なると主張している³⁹。佐伯らによると、短なわとび群においては、「例えば、二重とびが前とびと比べて高い跳躍となわを速く回す技術が必要であるように、個人的な高い技術や体力などを必要とする」ものが難易性の高い技とされるという⁴⁰。一方、連鎖（交互）とび群においては、「運動を同調させる難しさ」すなわち、他人と、縄を回す速さやジャンプのタイミングを合わせる難しさが高いものが難易性の高い技とされるというのである⁴¹。

この主張は正しいだろうか。確かに連鎖（交互）とび群は人・縄が増えるごとに難易性は増す。しかし、連鎖（交互）とび群は、「運動を同調

させる難しさ」によってのみ難易性が決まるわけではない。連鎖（交互）二重とびという技を考えてみると、連鎖（交互）とび群内にも、短なわとび群と同じ「高い技術や体力を必要とする」技が存在することがわかる。すなわち、短なわとび群と連鎖（交互）とび群とで難しさの観点が異なるとまでは一概に言えないのである。

佐伯らの説明では、連鎖（交互）とび群の難易性を高めるためには、運動を同調させる難しさを上げる、すなわち人・縄を増やすという方法しか存在しないかのような印象を読者に与えてしまいかねない。

ここでは、連鎖（交互）とび群が「なわとび」とみなされていないことで、なわとびとして共通して持っている性質が考慮されず、連鎖（交互）跳びの発展性が狭められてとらえられている。

第2節. 〈なわとび〉の転換の必要性

短なわとび群と連鎖とび群とを比較すると、連鎖とび群では、例えば、二人が縄を交互に回して跳ぶことができ、そのような跳び方は縄を1本しか使わない短なわとび群では行うことはできない。しかし両者は完全に無関係ということではない。なぜなら、連鎖とび群においても、短なわとび群と同じように交差とびや二重とびが行えるからである。

しかし、付録の図3のような「なわとび」と新たななわとび群とが完全に異なるものとしてとらえられている現状では、短なわとび・長なわとび群の方も、また連鎖とびのような新たななわとび群の方も、その発展性が狭められてとらえられていることが、前節では明らかとなった。

すなわち、短なわとび・長なわとびと、新たななわとび群とを、単に別物としてとらえるだけでは、なわとび全体の発展性が阻害されてしまいかねない。このような事態を防ぐためには、異なるなわとび群であっ

でも、なわとびとして持っている共通の性質が考慮される必要がある。そして、従来の〈なわとび〉が、付録の図4のような、新たななわとび群をも「なわとび」に含めた新たななわとびイメージへ転換される必要がある。

第4章. 〈なわとび〉の課題解決に向けて

第1節. 新たな系統図について

すべてのなわとび群を「なわとび」としてとらえる際には、なわとびとしてなわとび群全体に共通する性質や、なわとび群間の関係性も考慮する必要がある。異なるなわとび群であっても、各々の発展性を阻害しない形で、跳び方の位置づけを可視化できる新たな系統図があれば、その活用の範囲は広いであろう。

そこで筆者は、佐伯らの系統図が抱える問題点⁴²を改善し、次のようななわとびの系統図を考案した。それが図3である。

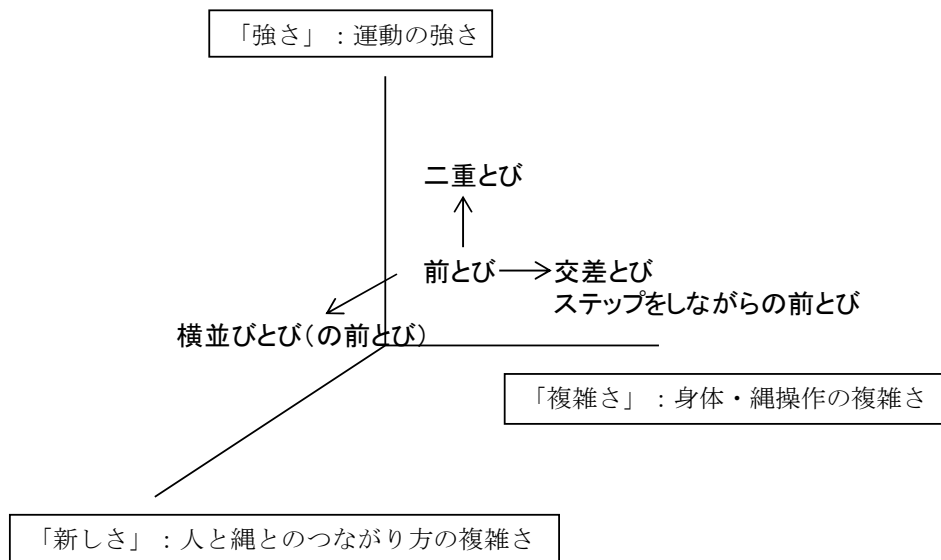


図3 新たななわとびの系統図

筆者作成。3つの軸上の値は外側へ行くほど大きくなるものとする。

同図において、運動の強さ、身体・縄操作の難しさ、人と縄とのつながり方の複雑さを、既存の跳び方との比較で説明すると次のようになる。

まず二重とびは前とびに比べ、縄を早く回旋させるための腕力や高くジャンプする脚力を必要とするので、運動の強さが高まる方向に移動する。以後、運動の強さは簡略化して「強さ」と呼ぶ。

次に、交差とびや前とび中にステップを踏む跳び方は、前とびと運動の強さは変わらないが、縄の動かし方・体の動かし方動きが複雑になるので、縄・身体操作の複雑さが高まる方向へ移動する。以後、縄・身体操作の複雑さは簡略化して「複雑さ」と呼ぶ。

最後に、横並びとび（の前とび）は短なわとび（の前とび）と比べると、運動の強さと複雑さは変わらないが、二人で1本の縄を持っているので、人と縄とのつながりの複雑さが高まる方向へ移動する。

なわとびでは、人と縄とのつながり方が複雑なものになると、たとえば、短なわとび、長なわとび、連鎖とび、ダブルダッチというように、異なるなわとび群として扱われることが多い。したがって、人と縄とのつながり方の複雑さとはすなわち、なわとびとしての新しさを生み出す可能性のあるものとも言える。そこで、以後、縄と人とのつながり方の複雑さは簡略化して「新しさ」と呼ぶ。

ただし、この系統図を使っても、例えば、交差とびとステップとでどちらがより複雑か、横並びとびと連鎖とびではどちらがより新しいか、といったことは決定できない。したがって、この系統図も完璧とは言えない。しかし、このような「強さ」「複雑さ」「新しさ」といった概念でなわとびの跳び方を整理することで、なわとびの世界をより正確に深く理解でき、指導や実際に行う際の手助けになると考える。

この三つの概念で、佐伯らの図上にある跳び方を整理しなおしたもの

が付録の図 6 である。

新たななわとびの系統図を用いてある跳び方の難易度を考えるときは、「強さ」「複雑さ」「新しさ」の 3 つの軸、および、3 つの軸からその跳び方がプロットされた点に垂直に引かれた直線で囲まれた直方体の体積を測ればよい。すなわち、その直方体の体積が小さければ小さいほど難易度が低い跳び方であり、体積が大きければ大きいほど難易度が高い跳び方であるということになる。

また逆の見方をすれば、難易度の高い跳び方ができるようになるためには、「強さ」や「複雑さ」や「新しさ」に幅を持って対応できる力が必要とされることがわかる。

第 2 節． 新たな系統図の利点

本節では特に、強さと複雑さという軸によって説明可能になった事象を取り上げる。

橋爪和夫と阿尾昌樹は、小学校 1 年生から 6 年生を対象に、短なわとびの技能の実態調査を行い、とんとんとび（一回旋二跳躍）に関して、以下のように述べている。

児童の運動発達段階から見て、児童はとんとんとび、前とび、二重とびの順になわ跳びスキルを習得し上達するものと仮定していた。しかし、実際に調査した結果、とんとんとびが習得できていないと前とびが上達しないというわけではないということがわかった。またとんとんとびは一度習得すれば定着するスキルではないということ、4 年生をピークに 5 年生 6 年生とできる割合が下がることもわかった。このことから、これまで、とんとんとび

を児童にとって簡単なスキルとしてなわとびの初期段階のみ導入してきたことを再検討する価値があることが分かった⁴³。

すなわち、調査から以下の2点の疑問が浮かび上がったのである。1点目は、なぜとんとんとびを習得せずとも前とび、二重とびを行うことができるのかであり、2点目はなぜとんとんとびは定着しないのかである。

筆者が考案したなわとびの系統図で、前とびを基準として、とんとんとびを考えてみる。ただし今回は同じ短なわとび群内における問題なので新しさは考えないものとする。さて、強さと複雑さという観点で考えると、以下の図にあるように、とんとんとびには2種類が存在することが分かる。

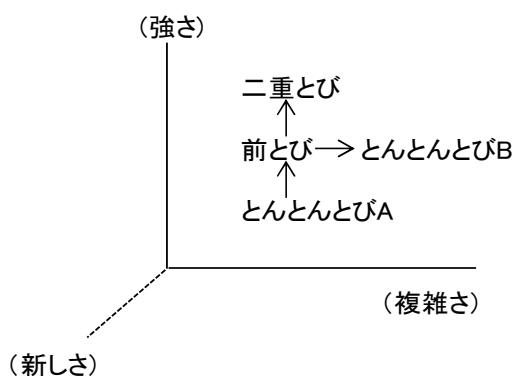


図 4 新たななわとびの系統図上における2つのとんとんとび

筆者作成

1種類目は、前とびより強さが低い位置にあるとんとんとび、すなわち前とびの縄の回旋速度を半分にしたものとしてのとんとんとび（とんとんとびA）である。そして2種類目は、前とびより複雑さが高い位置にあるとんとんとび、すなわち前とびの縄の回旋速度はそのままに、一

回旋中にもう一度跳ぶというステップを加えたものとしてのとんとんとび（とんとんとび B）である。前者は前とびに比べ難易度が低く、後者は前とびに比べ難易度が高いことがわかる。

さて、橋爪らの調査から浮かび上がった問題に立ち返って考えてみる。

なぜとんとんとびを習得せずとも前とび、二重とびを行うことができるのか。これは、ひとつには、とんとんとび B と二重とびとでは、行うために必要となる力が異なるからである。二重とびを行うためには、高く跳躍したり縄を速く回旋させる筋力が必要とされるが、とんとん B を行うために必要な、身体を複雑に動かす力は必要とされない。すなわち、とんとんとび B を行うために必要な力は、前とび、二重とびでは必要とされないのである。また、ふたつには、なわとびを始めた段階ですでに縄を回旋させる腕力が備わっていれば、すなわち初めから前とびが行うことができれば、とんとんとび A の段階を踏む必要がないからである。以上のことから、とんとんとび A、とんとんとび B 両者を習得せずとも、前とび、二重とびを行えることが説明できる。

次になぜとんとんとびは定着しないのか。小学校低学年の子どもはとんとんとび A を行っており、高学年の子どもは、縄を前とびの回旋速度で回すことが身についてしまっているために、とんとんとび B を行っているとみなすことができる。そして、とんとんとび B の方が難易度が高いためにとんとんとびができる子どもの割合が下がるのではないかと考えられる。

以上のように、筆者が考案したなわとびの系統図を活用することで、これまで解明されていなかったなわとびの問題に対して、仮説ではあるが説明が可能となりうるのである。

第3節. 新たな系統図から見える〈なわとび〉の新たな課題

橋爪らの調査における、とんとんとびに関する記述からは次のようなことが示唆される。現在行われている、主に体育でのなわとびには、「とんとんとび」という技名が存在するだけで、その跳び方の構造からとんとんとびを捉えなおす営みが、研究者、指導者の間でもほとんど行われてこなかったのではないか。

これは例えば「二重とび」にも当てはまる。二重とびを行うためには、縄が2周回るまでからだを空中にとどめる必要があるし、また逆に空中にいる間に縄を2周回しきる必要がある。そのためには高い跳躍をする脚力、また縄を速く回す腕力が必要である⁴⁴。

しかし、実際は、「コツがつかめさえすれば二重とびができるようになる」というとらえ方や、いわゆるなわとびカードの使用に見られがちな「前とび、交差とびができれば次に二重とびができるようになる」というとらえ方に指導者が陥っている場合がしばしばある。そのために、ある程度の筋力が必要であるという、二重とびの根本的な難しさが覆い隠され、その結果、教育の現場で混乱が生じているように思われるのである。

新たななわとびの系統図では、「技術」といった抽象的な言葉を使わずに、運動の強さ、身体・縄操作の複雑さ、人と縄とのつながり方の複雑さという三つの軸を使っている。そして跳び方の難易度は三つの軸上の値から総合的に決まるとしている。この新たな系統図が、なわとび全体の中で、ある技名の跳び方がどのように位置づけられるかを明らかにし、教育の現場での混乱を取り除く一助にもなれば幸いである。

終章

本論文では、なわとびの、その言葉の意味や、跳び方の多様性に着目し、わが国で一般にイメージされる「なわとび」という概念のとらえなおしについて論じた。

なお、本論文では、なわとびそのものの性質に着目するために、以下のことを自明なものとして扱っている。すなわち、「なわとび」には、「縄を跳ぶ」という、共通の性質をもったものとしての、領域が存在することである。

これは、「縄を跳ぶ」という「なわとび」の言葉の持つ意味からも一見、明らかであるように思われる。しかし、なわとびは、わが国では昭和 22 年から学校教育の中に教材として取り上げられているものの、独立した運動領域としての位置づけをされたことはない⁴⁵。すなわち、学校教育において、なわとびを、領域が存在するものとみなす根拠が明文化された形では存在しないのである。体育でのなわとびの研究において、なわとびが単なる「運動」としてしか記述されていないのはこのような背景も関係していると思われる。

そして、学校教育におけるなわとびのこのような状況と、見直すべき〈なわとび〉は不可分の関係にある⁴⁶。

そのため、恣意的に⁴⁷「なわとび」を、領域が存在するものとみなすことから始めなければ、なわとびそのものの性質から、〈なわとび〉をとらえなおすことはできないのである。ここに「なわとび」という概念を論じる難しさがある。

また本論文の成果は、例えば、わが国で「生涯学習・生涯スポーツとの関わりから一世を風靡するコンセプト」となっ⁴⁸た、「楽しい体育⁴⁹」論の、以下の部分に活用できる。

佐伯年詩雄は「楽しい体育では、『あるまとまりを持っている運動』が単元にあたる⁵⁰」と述べた。さらに、佐伯は「その運動を行う者のどのような欲求あるいは必要を充たすのか、どんな魅力があるのか、人は何を求めて自発的・自主的にその運動を進んで行おうとするのか」を「運動の機能的特性」と呼び、「楽しい体育の学習・指導計画は、単元の運動種目の機能的特性を明確にすることから始まる」と述べている。そして、「運動の機能的特性が明らかにされれば、それを生かすことによって運動への取り組み、つまり運動の学習が基本的には自発的・自主的なものとなる」という⁵¹。

本論文では、これまで領域としてみなされてこなかった「なわとび」を「あるまとまりを持っている運動」としてとらえなおしている。ただし、その性質については、本論文では、佐伯のいう「運動の技術や仕組みがどのような形態をなしているか」という「構造的特性⁵²」にしかほとんど触れられていない。しかし、本論文の成果が、なわとびの「機能的特性」を明らかにする手がかりにもなるだろう。なわとびの「機能的特性」を明らかにすることは今後の課題としたい。

今日、わが国では、なわとびの、様々な競技や遊び方が開発されてきている。その中には「フリースタイルなわとび⁵³」や「リズムなわとび⁵⁴」などの、縄を跳ぶことそのものを目的としたものもある。そしてたとえば日本ロープスキッピング連盟が開催している大会では、競技の中に「一般男子」「一般女子」という部門があり、高校を卒業した人間もなわとびを行っている姿が見受けられる⁵⁵。

しかし、それ以外のなわとび競技においては、実際に行うのは子どもたちのみで、おとなは指導に終始し、その競技の内容も、「みんなで」跳ぶ回数をひたすら重ねるだけというものも多い⁵⁶。

なわとび競技におけるこのような行い方は、確かに教育的な効果が期待できるかもしれない⁵⁷。しかし、そこでは、なわとびが、「いかに子どもの心身の発達に役立てられるか」という、教育する側の立場、佐伯のいう「やらせる側の論理⁵⁸」からしかとらえられていないのではないだろうか。

わが国では、1961年に制定された「スポーツ振興法」でスポーツ振興施策の方針が示され⁵⁹、また、それを改正し2012年に策定された「スポーツ基本法」では、「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利である」と述べられた⁶⁰。今日、スポーツをすることは義務ではなく権利であるとされ、またスポーツのレジャーとしての側面が強調されている⁶¹。

なわとびは、本来的には用具が手軽であり、狭い場所でも随所に実行できる可能性を持っている⁶²。また「まわして跳ぶ」という動作は4歳児半から可能である⁶³。

そして、なわとびについて、山市は「経験のさせ方次第によっては、単に幼児・子どもの運動遊びに留まらぬ、『奥』を感じさせる運動として人間の伴侶となりうる可能性をも併せもっている⁶⁴」と述べ、また高橋も「幼児から大人まで幅広い年代を対象としながら、発達段階や興味・関心の差異に対応できる⁶⁵」と述べている。

なわとびを、学習する側の立場、佐伯のいう「やる側の論理⁶⁶」からとらえなおし、なわとびの上記の性質を、単なる個人的な意見ではないものとして明らかにすることで、なわとびが、その手軽さとも相まって、真に「いつでも、どこでも、だれでも⁶⁷」という生涯スポーツ・生涯学習につながるものとなるのではないだろうか。

付録

なわとびの多様性についての補足

本論での、技と群との組み合わせに関する論述は、複雑な議論を避け、わかりやすさを考慮したものであり、正確には正しくない。以下、補足を行う。

本論ではレインボーを長なわとびと短なわとびが組み合わさったものとして紹介した。さて、そもそも、長なわとび自体も、横並びとびに跳び手が一人加わったものであると理解できる。この横並びとびを例に考えてみよう。横並びとびは短なわとびに回し手兼跳び手が一人加わったものであると理解できる。一方で、横並び跳びは、短なわとびを行う人間が二人に分離したもの（図 1 左から 2 番目）であるとも考えられる。このように考えると（以下、難易度や実現性は考慮しない）、横並び跳びでは、二人が、回す縄に対して内側の空間にいれば、短なわとびの技はすべて行うことができると理解できる。

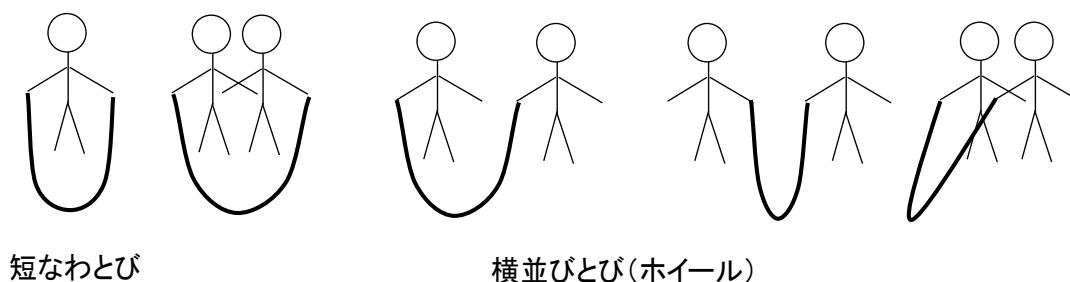
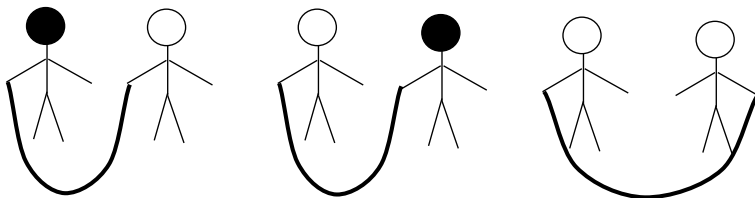


図 1 横並びとびの発展性 1

一方で、横並びとびは、二人の内、一人だけを跳ばせることができる（図 1 中央）。その際においても、跳び手と縄との位置関係、すなわち跳び手が縄の内側の空間にいることから、基本的には短なわとびの技はすべて行うことができることがわかるだろう。では、横並び跳びの技の

数は、違う人間が跳べば違う技になるものとすれば、すべてで〈短なわとびの技の数〉^{かける}×3（一人目だけが跳ぶか、二人目だけが跳ぶか、二人ともが跳ぶか）であるかというところではない。例えば、二重とびの技を行う際には、「一重目は一人だけが跳んで、二重目では二人ともが跳ぶ」といったことが可能であるのだ。また、「一重目では縄を横に流して回して（図1右端）、二重目では一人が跳ぶ」といったことも可能である。

さらには、横並びとびでは、片方の回し手は後ろ回しをして、片方の回し手は前回しをすることも可能である（図2左・中央）。



横並びとび(ホイール)

図2 横並びとびの発展性2（黒は後ろを向いていることを表す）

つまり、横並びとびの二重とびの多様性を考えるだけで、以下の要素に気づくはずである。まずは短なわとびにおける二重とびの技の多様性である。さらに、それに加え、一重目、二重目それぞれで、一人が跳ぶか、二人ともが跳ぶか、二人とも跳ばないか、一人が跳ぶ場合にはどちらか跳ぶか、そして二人がそれぞれ前回しをするか後ろ回しをするか、といったことである。なお、横並びとびは、回旋の途中で、縄の持ち手を左右変えることもできる。また、縄の回る向きは変えずに、体をひねることで回し手に対しての縄の回る向きを変えることもできる。前者の例を挙げる。たとえば図1中央の、左側の跳んでいる人間が右手に持っている縄を回旋の途中で左手に持ち帰ると、図1右から2番目の状態で

縄を回すことができる。次に後者の例をあげる。たとえば図 2 中央の跳び手が前とび方向で縄を回しているとする、回し手だけの人間にとっては後ろ向きに回していることになる。その状態から、回旋の途中でこちら（読者にとって）を向くと、図 2 右の状態になり、縄を回す向きは回し手にとって前向きに変化している。

さて、以上のように考えると横並びとびだけでも膨大な数の跳び方が存在することがわかる。ただし、これは単純な掛け算のみによって導かれたものではない。

レインボーは、このような横並びとびに跳び手が一人加わり、さらにその跳び手が短縄を持ったものである。レインボーで、上記のような考察をするとこちらも非常に細かく複雑になってしまう。しかし、読者にはレインボーは長なわとびと短なわとびが組み合わさったものとして直感的に理解しやすいと思われた。そこで、本論の中では、上原も述べているとおり〈長なわとびで行える技の数〉×〈短なわとびで行える技の数〉の跳び方を持ったものとしてレインボーを紹介したのである。

また、本論における「技」という言葉は、厳密にいうと、単なる「跳び方」という意味と「短なわとびにおける縄の回旋方法を基調とした縄の回し方（例えば「交差」や「二重」など）」という意味とが混同されている。

筆者は、なわとびの「新種の生物を探すように、新しい跳び方を探すことができる」という側面が、なわとびが持つ「楽しさ」のひとつの要素であると考えている。

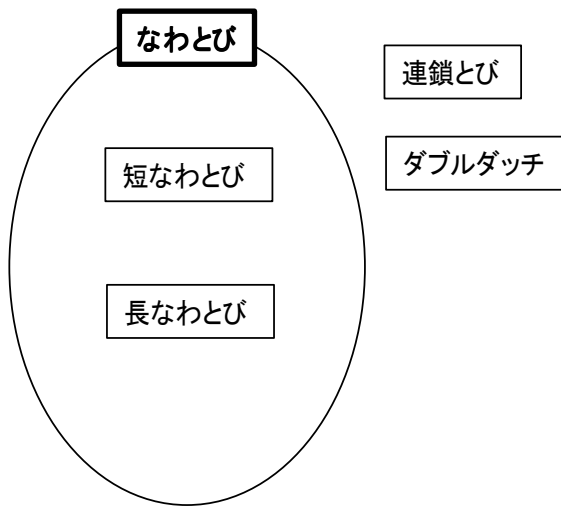


図 3 従来のなわとびイメージ (くなわとび)

筆者作成

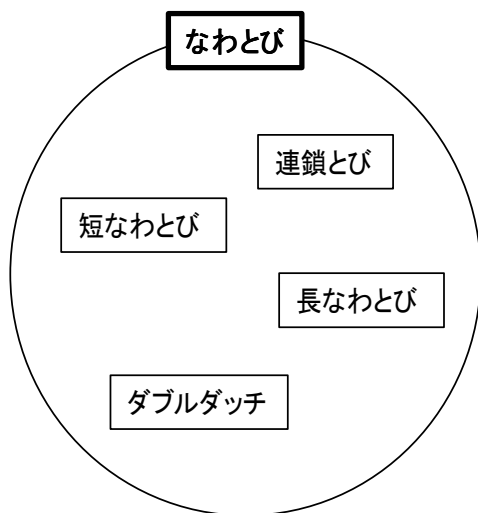


図 4 新たななわとびイメージ

筆者作成

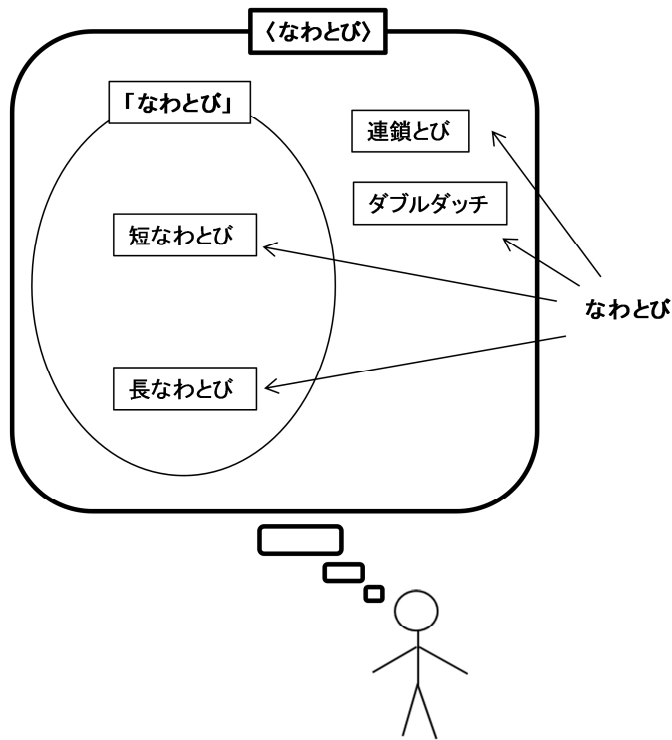


図 5 本論における「なわとび」という言葉がさす意味

筆者作成。なお「なわとびという言葉」という意味でも「なわとび」と使う。

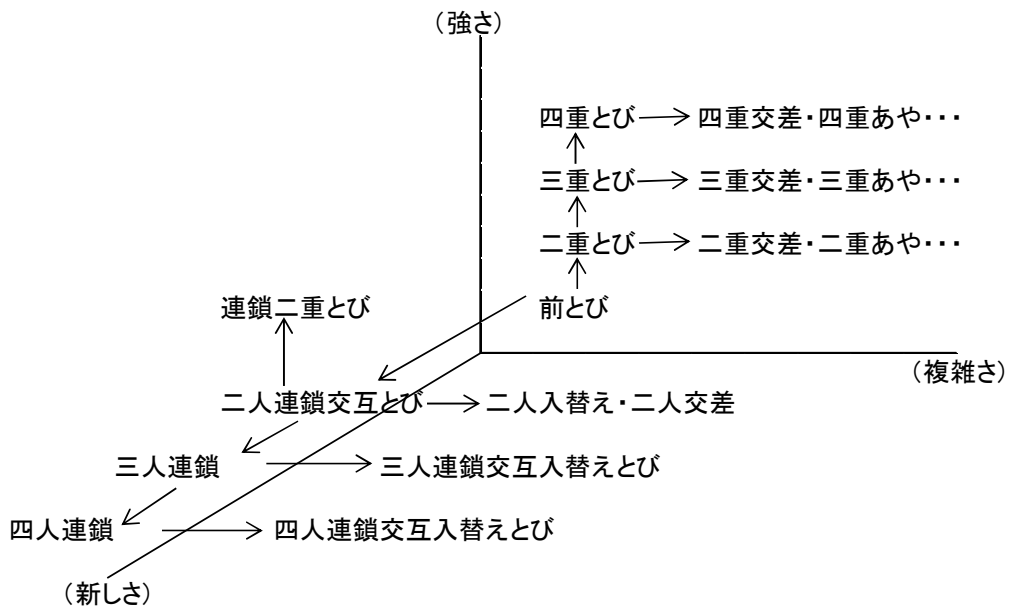


図 6 短なわとび群と連鎖（交互）とび群の新たな系統図

筆者作成

参考文献

- ・井上俊・菊幸一編著『よくわかるスポーツ文化論』ミネルヴァ書房，2012。
- ・上原三十三「なわとび運動の教材づくり」『愛知教育大学保健体育講座研究紀要』26，2001，11-16。
- ・上原三十三「なわとびの新しい教材」『愛知教育大学保健体育講座研究紀要』29，2004，23-29。
- ・甲斐健人「学校体育と生涯スポーツに関する覚え書き」『奈良女子大学スポーツ科学研究』14，2012，73-81。
- ・香川正弘・宮坂広作編著『生涯学習の創造』ミネルヴァ書房，1994。
- ・久保正秋『体育・スポーツの哲学的見方』東海大学出版会，2010。
- ・日下裕弘・加納弘二『生涯スポーツの理論と実際：豊かなスポーツライフを実現するために』改訂版，大修館書店，2010。
- ・倉内史郎・鈴木真理編著『生涯学習の基礎』学文社，1998。
- ・黒川國児・浅沼道成・清水茂幸編著『生涯スポーツ概論』改訂，中央法規出版，2004。
- ・佐伯年詩雄『これからの体育を学ぶ人のために』世界思想社，2006。
- ・佐伯聡史・池田優介「新しい教材としての『連鎖交互とび』の有用性について」『富山大学人間発達科学部紀要』5(2)，2011，67-73。
- ・坂本勝江「なわとび運動に関する調査：保育科学生の意識と実態から」『茨城女子短期大学紀要』16，1989，81-98。
- ・新谷崇一「女性の生涯スポーツに関する社会学的研究：一般社会人女性のスポーツ参与に関わって」『行政社会論集』5(1)，福島大学行政社会学会，1992，1-31
- ・杉本厚夫編『体育教育を学ぶ人のために』世界思想社，2001。

- ・高橋浩二「身体教育を通じた身体観の変容可能性の探究(その 3) : 体
つくり運動から捉えた身体運動の学習から発生への転換」『大阪産業
大学人間環境論集』11, 2012, 1-18。
- ・谷本雄一・日野克博「中学校体育におけるダブルダッチ教材の実践的
研究」『愛媛大学教育実践総合センター紀要』25, 2007, 71-81。
- ・玉木正之『スポーツとは何か』講談社, 1999。
- ・橋爪和夫・阿尾昌樹「児童の短なわ跳び運動の実態調査」『富山大学教
育学部紀要』59, 2005, 81-87。
- ・藤田雅文「小学生に対する短なわ跳びの指導法に関する研究 : 前方二
重跳びの段階的指導」『鳴門教育大学実技教育研究』17, 2007, 37-45。
- ・ポール・ラングラン『生涯教育入門』波多野完治訳, 全日本社会教育
連合会, 1971。
- ・水落芳明・松谷和彦「コンビネーションなわとびによる人間関係の向
上に関する事例的研究」『上越教育大学研究紀要』32, 2013, 161-168。
- ・梁川悦美「本学保育・児童学科における体育関連科目の果たす役割
(3) : 「リズムなわとび」に着目して」『東京家政大学研究紀要. 1, 人文
社会科学』48, 2008, 109-115。
- ・山市孟「11075 なわ跳びに関する教材史的考察 : グーツムーツ、シュ
ピースのなわ跳びに関する教材観の比較考察を中心にして」『日本体
育学会大会号』32, 1981, 791。
- ・日本ロープスキッピング連盟(JRSF)とは http://jrfsf.jp/?page_id=984
2014年12月31日閲覧
- ・JRSFトリックシート <http://trick.jrfsf.jp/> 2014年12月31日閲覧
- ・JRSF競技種目 <http://jrfsf.jp/?p=1478> 2015年1月2日閲覧

- ・ なわとびかっ とび王選手権 2014 <http://www4.nhk.or.jp/P2741/>
2015 年 1 月 3 日閲覧。
- ・ ロープ・ジャンプ・EX
<http://www.recreation.or.jp/kodomo/rjex/index.html>
2015 年 1 月 3 日閲覧。
- ・ ロープジャンプ EX とは
http://www.recreation.or.jp/kodomo/rjex/basic/about_rjex.html
2015 年 1 月 3 日閲覧。
- ・ 文部科学省 スポーツ基本法（平成 23 年法律第 78 号）（条文）
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm
2014 年 1 月 3 日閲覧。

注

- 1 ポール・ラングラン、『生涯教育入門』波多野完治訳，全日本社会教育連合会，1971，p.73
- 2 生涯教育が教えるがわの立場を中心にして述べられた考え方であるのに対して、生涯学習は学習者の立場を中心にして述べられた考え方である（香川正弘・宮坂広作編著『生涯学習の創造』ミネルヴァ書房，1994より）。ただしここでは「生涯教育（学習）とは何か」に関する深い議論は行わないものとする。
- 3 前掲1、p.73
- 4 玉木正之『スポーツとは何か』講談社，1999，p.184
- 久保正秋『体育・スポーツの哲学的見方』東海大学出版会，2010，pp.3-7
- 5 例えば、甲斐健人は「体育・スポーツ教育」にあたる言説を「身体活動ないしスポーツ活動」としてとらえている（甲斐健人「学校体育と生涯スポーツに関する覚え書き」『奈良女子大学スポーツ科学研究』14，2012，73-81，p.75より）が、両者の言葉の間には明らかに意味の違いがある。
- 6 新谷崇一「女性の生涯スポーツに関する社会学的研究：一般社会人女性のスポーツ参与に関わって」『行政社会論集』5(1)，福島大学行政社会学会，1992，1-31，p.2
- 7 山市孟「11075 なわ跳びに関する教材史的考察：グーツムーツ、シュピースのなわ跳びに関する教材観の比較考察を中心にして」『日本体育学会大会号』32，1981，p.791
- 8 同上、p.791
- 9 坂本勝江「なわ跳び運動に関する調査：保育科学生の意識と実態から」『茨城女子短期大学紀要』16，1989，81-98，p.94
- 10 道具としてのなわとびには本論では触れない。
- 11 「スポーツとは何か？」という問いに対する答えは「スポーツ学者の数だけある」と言われる（玉木正之『スポーツとは何か』講談社，1999，p.20）が、ここではその議論は行わないものとする。
- 12 なわとびと異なり、スケートは一般には「氷の上を滑る『運動』である」とは言われまいだろう。このなわとびとスケートの概念の違いにここでは触れているのである。
- 13 久保正秋『体育・スポーツの哲学的見方』東海大学出版会，2010，pp.115-116
- 14 日本ロープスキッピング連盟（JRSF）とは
http://jrfs.jp/?page_id=984 2014年12月31日閲覧
- 15 同上
- 16 高橋浩二「身体教育を通じた身体観の変容可能性の探究(その3)：体づくり運動から捉えた身体運動の学習から発生への転換」『大阪産業大学人間環境論集』11，2012，1-18，p.10
- 17 同上、p.10
- 18 例えば「あそび」といった概念がスポーツの意義の中で語られる（玉木正之『スポーツとは何か』講談社，1999，p.19より）。こうした概念について逐一説明していくと、議論が広大な範囲に及んでしまうと思われる。
- 19 そもそもなわとびはスポーツとしてとらえられてこなかったもので、

終章でも述べるが、そのスポーツとして持つ目的はほとんど明らかにされていない。現段階で多くを述べても、単なる筆者の個人的な意見または仮説ということになってしまうと考え、本論で述べることは控えた。

²⁰ 前掲 16、p.10

²¹ 複数の縄を使うなわとびに対して、縄を 1 本使うなわとびであることを明示する場合に「短」縄ではなく「単」縄という文字が使用されることがある。

²² 水落芳明・松谷和彦「コンビネーションなわとびによる人間関係の向上に関する事例的研究」『上越教育大学研究紀要』32, 2013, 161-168, p.162

²³ 上原三十三「なわとび運動の教材づくり」『愛知教育大学保健体育講座研究紀要』26, 2001, 11-16, p.11

²⁴ 同上、p.11

²⁵ 同上、p.11

²⁶ 1 章で述べた、「身体運動としてのなわとび」という概念を考慮し、なわとびの分類という文脈で、筆者の言葉で跳び方の名称を述べる際には、「運動」という言葉を使わない。すなわち、「短なわとび運動」という言葉には「1 本の縄を自分で回し自分で跳ぶという動作」という意味がある。一方「1 本の縄を自分で回し自分で跳ぶという『跳び方』」を指す場合には「短なわとび」という言葉のほうが適切であると思われるのである。

²⁷ JRSF トリックシート <http://trick.jrsf.jp/> 2014 年 12 月 31 日閲覧

²⁸ 45 秒～75 秒以内に自由に技を組み合わせた演技を行い難易度や完成度を競うもの。JRSF 競技種目 <http://jrsf.jp/?p=1478> 2015 年 1 月 2 日閲覧

²⁹ ここでの「一（二）重とび」は、縄を一（二）回旋させて行う跳び方という意味である。

³⁰ 前掲 23、p.14

³¹ 同上

³² 前掲 9、p.96

³³ 谷本雄一・日野克博「中学校体育におけるダブルダッチ教材の実践的研究」『愛媛大学教育実践総合センター紀要』25, 2007, 71-81, p.71

³⁴ 同上、p.72

³⁵ 同上

³⁶ 連鎖交互とびとは、連鎖とびで、回す 2 本の縄同士を 180 度ずらして行う跳び方である。すなわち、2 本の縄が同時に地面につくのではなく、片方の縄が地面についている瞬間、もう片方の縄は頭上を通過している。

佐伯らは「連鎖交互とび群」と呼んでいるが、筆者の、「群」の人と縄のつながり方が固有のものをそれぞれ「群」と呼ぶという分類方法で考えると、連鎖交互とびは連鎖とび群の中の、2 本の縄を交互に回す技であると理解できる。したがって、本論文では以後、佐伯らの論文の中で「連鎖交互とび群」という名で扱われているものでも、「連鎖とび群」という概念で説明可能である部分は、連鎖（交互）とび群と表記する。

³⁷ 佐伯らは論文のはじめに、短なわとびを「なわとび」とすると述べていた（p.67）。したがって図の名前は正確に言うと、「短なわとびと連鎖交互とびの系統図」である。短なわとびを「なわとび」としている点に

において、すでに筆者が指摘する従来のなわとびイメージ（付録の図3）であることがわかる。佐伯聡史・池田優介「新しい教材としての『連鎖交互とび』の有用性について」『富山大学人間発達科学部紀要』5(2), 2011, 67-73

³⁸ 後の脚注でも述べるが、これらの軸は問題をはらんだ概念なので、ここでは詳しく説明しない。

³⁹ 佐伯聡史・池田優介「新しい教材としての『連鎖交互とび』の有用性について」『富山大学人間発達科学部紀要』5(2), 2011, 67-73, p.69

⁴⁰ 同上

⁴¹ 同上

⁴² 佐伯らの系統図には、まず用語の解釈の難しさがある。例えば「難易性」の中の「技術」とは何を指すのだろうか。「なわを速く回す技術」があるのであれば、「縄を複雑に回す技術」もありそうであるが、それは「難易性」とは別の「複雑性」とされている。そもそも、「複雑なことをするのは難しい」ということから分かるように、難易性という言葉が複雑性の意味も含みうるもので、理解しづらいものとなっている。そして、佐伯らの系統図では短なわとび群と連鎖（交互）とび群とが同じ平面に並べられている。この図では、説明可能な形で、連鎖交互二重跳びといった発展性を考えることが困難である。

⁴³ 橋爪和夫・阿尾昌樹「児童の短なわ跳び運動の実態調査」『富山大学教育学部紀要』59, 2005, 81-87, p.87

⁴⁴ この点について、林俊雄は小学校2年生30名の調査で、二重とびが5回以上できるためには、30秒早回しとびが80回以上できることが目安であると述べている。林俊雄「効果的な指導のために押さえておきたいなわとび技術の系統とつまずきのメカニズム」『学校体育』38(13), 日本体育社, 1985, 43-48。

⁴⁵ 前掲9、p.98

⁴⁶ 体育で「なわとび」が領域を持ったものとみなされていないために、一般でも、「なわとび」が領域を持ったものとみなされていないのか、それとも、一般に「なわとび」が領域を持ったものとみなされていないために、体育でも「なわとび」が領域を持ったものとみなされていないのかは判断できない。両者は密接に結びついている。したがって「なぜ体育で『なわとび』が領域を持ったものとみなされていないのか」という問いに「一般に『なわとび』が領域を持ったものとみなされていないからである」と答えるのはトートロジーである。

⁴⁷ 「学問的裏付けがない状態で」といった意味である。

⁴⁸ 佐伯年詩雄『これからの体育を学ぶ人のために』世界思想社, 2006, p.208。

⁴⁹ 佐伯は『楽しい体育』とは、一般的には、運動の楽しさを求め、楽しく運動の学習が進むように組織される体育をいう。しかし、正確には、それぞれの運動に備わっている行う者にとっての意味や価値の学習を重視し、それを中心に授業を組織し、実施する体育のことであると述べている。同上、p.170

⁵⁰ 同上、p.179

⁵¹ 同上、p.183

⁵² 同上、p.180

⁵³ 前掲28

54 音楽のリズムに合わせて行なうなわとび。梁川悦美「本学保育・児童学科における体育関連科目の果たす役割(3):「リズムなわとび」に着目して」『東京家政大学研究紀要. 1, 人文社会科学』48, 2008, p.109

55 日本ロープスキッピング連盟(JRSF) <http://jrfsf.jp/> 2015年1月3日閲覧。

56 例えば、長なわとびで、跳び手が8の字を描きながら縄を跳び抜けていき、制限時間内に何人が跳べるかを競う「なわとびかっぴ王選手権」や、長なわとびで、制限時間内に跳んだ人数と跳んだ回数を競う「ロープ・ジャンプ・エクストラ(ロープジャンプ)」などである。

なわとびかっぴ王選手権 2014 <http://www4.nhk.or.jp/P2741/> 2015年1月3日閲覧。

ロープ・ジャンプ・EX

<http://www.recreation.or.jp/kodomo/rjex/index.html> 2015年1月3日閲覧。

57 特に、「ロープ・ジャンプ・エクストラ(ロープジャンプ)」は、そのHP内で、「教育的効果」を大きく取り上げている。「運動やスポーツをする時間が増えた」といったことまで書かれてある。しかし、これはその競技に取り組むことで体を動かすわけであるから当然のことである。ロープジャンプEXとは

http://www.recreation.or.jp/kodomo/rjex/basic/about_rjex.html 2015年1月3日閲覧。

58 前掲48、p.80

59 倉内史郎・鈴木眞理編著『生涯学習の基礎』学文社, 1998, pp.210-212

60 文部科学省 スポーツ基本法(平成23年法律第78号)(条文)

http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/attach/1307658.htm 2014年1月3日閲覧

61 前掲48、p.21

井上俊・菊幸一編著『よくわかるスポーツ文化論』ミネルヴァ書房, 2012, p.82, p.170

62 前掲7、p.791

63 前掲48、p.109

64 前掲7、p.791

65 前掲16、p.9

66 前掲48、p.80

67 日下裕弘・加納弘二『生涯スポーツの理論と実際:豊かなスポーツライフを実現するために』改訂版, 大修館書店, 2010, p.2